

**京都大学教育学部・教育学研究科における
教育への評価結果に関する
学生アンケート 報告書
-教育学研究科版-**

平成21年12月7日 実施

はじめに

国立大学の法人化に伴い、平成 16 年度からはじまった第 1 期中期目標期間の業務にたいする大学評価・学位授与機構による中間評価が平成 20 年度に実施され、その現況分析結果（評価結果）が公表された。その評価結果によれば、京都大学大学院教育学研究科は、平成 16～19 年度の「**評価結果（研究）**」（学部も含む）において、研究活動の状況ならびに成果については「期待される水準を上回る」、「Ⅱ．質の向上度」についても「大きく改善、向上している、または高い質（水準）を維持している」という高い評価を、大学評価・学位授与機構からうけた。また「**評価結果（教育）**」においても、大方の項目で「期待される水準にある」と評価され、分析項目 V 「進路・就職の状況」については「期待される水準を上回る」、さらに「Ⅱ．質の向上度」についても「大きく改善、向上している、または高い質（水準）を維持している」という高い評価をうけた。

しかし、分析項目Ⅳ「学業の成果」の 2 つの観点のうち、「学生が身に付けた学力や資質・能力」について、「大学院修士課程の留年者が最終学年在籍者の約 3 割に達する（平成 18 年度）こと、大学院博士課程の修了者がほとんどいないこと」から、「期待される水準を下回る」と大学評価・学位授与機構より評価された。その結果、分析項目Ⅳ「学業の成果」が「期待される水準を下回る」と評価された。

この大学評価・学位授与機構による評価結果を踏まえ、本研究科では様々な対応策を実施してきたが、この問題に対する関係者の意見を聞きさらなる改善策を探るため、平成 21 年 12 月に、本研究科に所属する大学院生にアンケート調査を実施した。平成 21 年 12 月現在、教育学研究科の大学院生（修士課程 97 名、博士後期課程 117 名）は 214 名であり、今回のアンケートの回収数は 110 枚（回収率 51.4%）である。

本稿では、アンケート調査の結果から読み取れる問題の特徴について分析しその対応策を明らかにする。6 頁以下には、具体的な数値を掲載しているので参照されたい。自由記述部分については、その内容から個人が特定できる場合もあるため、本稿の分析の中では特徴的なものを紹介するにとどめているが、教員に対してはすべての記述を掲載した資料を配布し、内容と問題点を共有することによってさらなる改善に役立てるようにした。

1. 専門性志向の高さが問題の原因である

「修士課程の留年者が約 3 割に達すること、博士課程の修了者がほとんどいない」ことについては、その理由について尋ねた質問【1】への回答において「1. 就職準備のためわざと留年（47%）」「2. 海外へ留学していたため（24%）」となっていることから、専門性志向の高さがその理由であることがうかがわれる（注）。また、質問【4】への回答が示す通り、本研究科の大学院生は、専門性を活かした就職（「大学などの教職」「教師以外の校務員」「専門性を活かして企業に就職」）を志向する者が 85%に上っていることもこの理解を裏付けている。

（注）ただし、質問【1】については、該当する院生本人に自分の理由について回答を求めているものではない点に限界がある。回答者の周囲にいる目立つ例をもとに回答することも想像されるため、この割合が実態をあらわしているかは明らかではない。

大事な点は、例えば留学による留年が肯定的に評価されるべきことで怠学と同時に扱えるものではないように、留年率の高さについては、留年の理由にまで踏み込んだ理解が必要である。また、「1. 就職準備のためにわざと留年」の回答数の高さも、履歴に空白が生じるよりも留年する方が専門性を高められる点でも有利だという院生自身の判断が働いていることを示している。そのことは「その他」に対する自由記述欄にも、「自ら納得して残っている人も少なくないのでは。修了・卒業後の就職先が不足して出るに出られない」という声からもうかがうことができる。

このような点を考慮すると、質問項目の中に「進学準備のためわざと留年」という項目を入れることも含め、積極的な意味を持つ留年についてアンケートを作成すべきであった。「その他」の回答でも、「留年してでも博士課程に進学したい院生が他大に比べて多いためかと思う」という声が寄せられている。年数により機械的に修了させることでは、本研究科に対する大学院生の満足度が下がる可能性があるだろう。

アンケートの質問【1】では、「修士課程の留年者が多いこと」と「博士課程の修了者がほとんどいない」という2つの異なる項目を同時に聞いたため、院生の回答も分裂してしまい明快さをやや欠いている。アンケート結果の分析を拡散させないため、ここではまず「**修士課程の留年者が多いこと**」についてみていきたい。

教育学研究科の修士課程の定員は42名（このうち研究者養成コースは32名）、博士後期課程の定員は25名である。他大学の研究科出身で博士後期課程からの編入を希望する者もあることから、博士後期課程への進学を希望する本研究科のすべての修士課程修了予定者が自動的に進学できるわけではない（博士後期課程志願者は平均すると50名前後）。一方、修士課程修了予定者のほとんどが進学を希望しているため、進学できなかった者は次の機会に賭けて留年を選択することになる。そのことはアンケートの結果からも明らかである。

このように本研究科における修士課程の最終学年在籍者の多さは、院生自身の怠学のためではなく、またその研究水準が他と比べて不十分なためでもなく、さらにまた教員による指導が不足しているわけでもなく、院生の専門性志向の高さと修士課程定員数に対する博士後期課程定員数の少なさによって生じていると解することができる。ちなみに平成21年度における博士後期課程への内部からの進学希望者は28名、このうち合格者は22名、不合格者は6名である。この6名はすべて留年の道を選択した。博士後期課程の定員を拡大することによって問題は解決できるかもしれないが、これでは博士後期課程の研究と教育のレベルを下げることにもなりかねない。それでもなお留年者が多いことは問題であることはまちがいない、なんらかの対策を講じる必要がある。そのため本研究科では、研究者志望で求められるだけの研究能力に達しない院生に対して、研究職以外の進路を示唆することなどで、留年者数を減らす努力をしてきた。この点については、すでに今回の大学評価・学位授与機構による中間評価においても、修士課程修了者の進学率71.8%、就職率25.6%とともに良好であるなどの優れた成果から、分析項目V「進路・就職の状況」について「期待される水準を上回る」という高い評価をうけているが、さらなる努力を深めたい。

以下質問①②についての院生の声を付記しておく。

質問①「本研究科の教育などでよかったと思う点を具体的にお書きください」に対する回答においても、次のような記述がみられる。

□自分が納得するまで考えさせてくれるところ。スキルを伸ばすと同時に、研究者としての個性を伸ばすことを忘れないでくれていると思う。

一方で、質問②「改善してほしい点は何でしょうか」に対しては、次のような回答もある。

□留年するのもD論を出すかどうかその人のこれまでやこれからに拘わっているのも外部評価も気になると思いますが、基本的にその人にまかせてもらえたらと思います。

□就職関係。上の学年がたまっている気がする。

2. 教育内容・教員の指導の在り方については、概ね高い満足度を得ている

次に、質問【1】において、「4. 研究内容相違 (20%)」「5. 教員の指導不足 (13%)」は比較的低い回答となっている。教員の院生への関わり方を尋ねた質問【2】においても、「5. 十分に満足している」「4. 満足している」の回答は合わせて70%となっており、教員の指導については概ね高い評価を得ていることが読み取れる。教育学研究科の教育についての満足度を尋ねた質問【5】においても、「5. 十分に満足している」「4. 満足している」を選んだ回答数が多かった（「1. 専門科目カリキュラム、内容など全般 (73%)」「2. 教員の研究指導・熱心さ・アドバイスの的確さ等 (72%)」「3. 博士・修士論文の指導 (67%)」)。したがって、「教育内容」と「教員の指導の在り方」については、概ね高い満足度を得ているといえる。

質問①「本研究科の教育などでよかったと思う点を具体的にお書きください」に対する回答においても、次のような記述がみられる。

- 先生の指導は適確。教員は学生に対して熱心。
- 教員が学生の自主性や、人格を尊重してくれるところ。学生が必要とする時はいつでも親身に相談にのってもらえるところ。
- 教員が一流であり、その言葉や考え方に触れることに学びがある。研究は難しいが、取り組むことで生きていく上での糧を得られる。優れた研究者はごく一部であり、学生全員をどうしようと思うことには無理があるのでは？

しかしながら、「先生方が忙しすぎて、お会いするのに気がひけてしまう」と、教員の多忙を慮る声も寄せられている。教員側にとっても、各種外部競争資金によるプロジェクトが増加する中で、教育にかける労力の限界を感じる場面もあり、改善を図るべき点であろう（本研究科ではグローバル COE・概算（特別経費）・大学院 GP の3つのプロジェクトが進行中である。このプロジェクトの成果が「評価結果（教育）」における「II. 質の向上度」の「大きく改善、向上している、または高い質（水準）を維持している」という高い評価をもたらしており、さらに後で述べるように、このプロジェクトの資金が院生の研究への経済的支援の財源になっているので、単純にプロジェクトを減らせばよいわけではない。詳細は本ホームページを参照）。

また、「4. 進路指導などの教員による助言・サポート (55%)」については、改善の余地があるとも考えられる。自由記述欄については、「就職に関して、暗黙の了解的な感じでセンパイから聞き伝えられるだけなので、オープンに説明してもらえるとありがたいです」といった声が寄せられている。

3. 研究科が求めている論文の水準について

質問【1】において、「3. 修士論文や博士論文の要求レベルが高すぎる」を選んだ回答は、38%（修士課程 47%、専修コース 92%、博士後期課程 29%）となっている。

修士課程で終了する社会人向けの専修コースの大学院生に、論文のレベルの高さを指摘する回答が多いことは、注目すべき点であろう。これは、専修コースの大学院入試において、論文が課せられていないにもかかわらず、修了の時点では研究者養成コースの修士論文と同等水準の論文が求められていることの反映であると考えられる。ただし一方で、専修コースにおいては、教員の院生への関わり方についての満足度を尋ねた質問【2】において、「5. 十分に満足している」「4. 満足している」を選んだ回答が実に 92%に上っており、「2. あまり満足していない」「1. 大いに不満がある」を選んだ回答は 0%である。専修コースの院生のニーズに応じて、教員が手厚い指導をしていることの反映だと考えられる。このような状況から、大学院入試を早め大学院入試における論文審査を課すことを止めた場合、修士論文で求められる水準に到達させるために教員による多大な支援・指導を必要とする院生が増加することが予想される。

ここであらためて「博士課程の修了者がほとんどいない」というもう一つの問題についてアンケート結果を分析し、これまでの本研究科の対応策ならびにこれから改善すべき課題について明らかにしたい。

博士後期課程において、「3. 論文の要求レベルが高すぎる」を選んだ回答は 29%にとどまっている。①「本研究科の教育なのでよかったと思う点を具体的にお書きください」のところでは、「自分が納得するまで考えさせてくれるところ。スキルを伸ばすと同時に、研究者としての個性を伸ばすことを忘れないでくれていると思う」、「教員の論文に対する、質維持の意識が高い」といった声がある一方で、「学問的なレベルを落とすわけにはいかないが、他大学他研究科における学位取得より、ハードルが高いと思われる。それでは就職活動において大変不利である」という指摘には配慮すべきだろう。しかし、学位取得のハードルを下げることで研究者としての質が下がれば、かえって就職活動においても不利に働く危険性がある。「自らの論文に対する要求水準が高い人が多い(中途半端な論文は出せないという気持ち)」ことは望ましいが、「『3年で書くもの』という観念がないため」、「自分が納得できる水準の研究が出来てないため。D論を3年以内を書くか書かないかは本人次第なので、数字の問題ではない」といった院生の意識については変えていく必要がある。

本研究科においては、毎年4月のガイダンスにおいて、博士論文提出までのプロセスと手続きを明示した『博士学位論文作成要領』（全 54 頁）をもとに、課程博士の学位取得のための具体的な手順を院生に説明し動機づけを図っているが、さらにこのようなガイダンスの在り方を工夫し、院生の意識改革を進める必要がある。また同時に、指導している教員に対しても、課程博士の学位を出していくことへのさらなる自覚を高めることが必要である。今回の暫定評価の結果を踏まえ、院生と教員の意識改革も着実に進行しており、その成果は近いうちに数字にも表われるものと思われる。

4. 経済的事情や施設・設備面、事務手続きについて

質問【1】において、「6. 経済的な理由等」を選んだ回答率は 22%である。自由記述欄において

は、「経済的支援が充実していること」が良いという回答もみられる反面、「必要不可欠な費用(学会の参加費や出張費など)」に経費が使えないという声もある。グローバル COE・概算(特別経費)・大学院 GP の3つのプロジェクトにおいて、院生主体の授業「研究開発コロキウム」に研究の予算を付けるなど、院生の研究支援を経済面からも図っている。海外での院生の研究発表などにも助成金を出しており、この意味では院生の研究支援における経済的な援助は手厚い。しかし、院生のニーズにより細やかに応じていく工夫が必要だろう。

質問【5】において学生の満足度が一番低かったのは、「教育施設・設備」である(「5. 十分に満足している(13%)」「4. 満足している(36%)」)。「一人一つの机がない。PCもないのはどうかと思う」というのは、切実な声であろう。このような施設・設備面への批判は、現在、本研究科の本館が耐震工事の最中であることにもよるが、それが終了してもなお、本研究科のスペースは十分なものとは言い難い。これについては研究科の努力で解決できるものではないので、継続的に大学本部に働きかけていく必要があるだろう。

質問【5】において尋ねた「5. 教務等の事務的なサポート体制」については、「5. 十分満足している(14%)」「4. 満足している(42%)」となっている。親切な対応を感謝する声も寄せられている一方で、「事務事項(奨学金・他)の伝達が掲示だけでは不便である。研究科HPによる通知をお願いしたい」という声もある。これについては、今後クラシスの活用が拡大されるにしたがって、改善されることが予想される。

第2期中期目標期間においては、以上のような問題点を考慮しながらさらなる教育の改善に勤めていく必要がある。

(1)実施方法

はじめにを参照

(2)提出状況

教育学研究科登録者数 . . . 214名

アンケート回収数 . . . 110枚

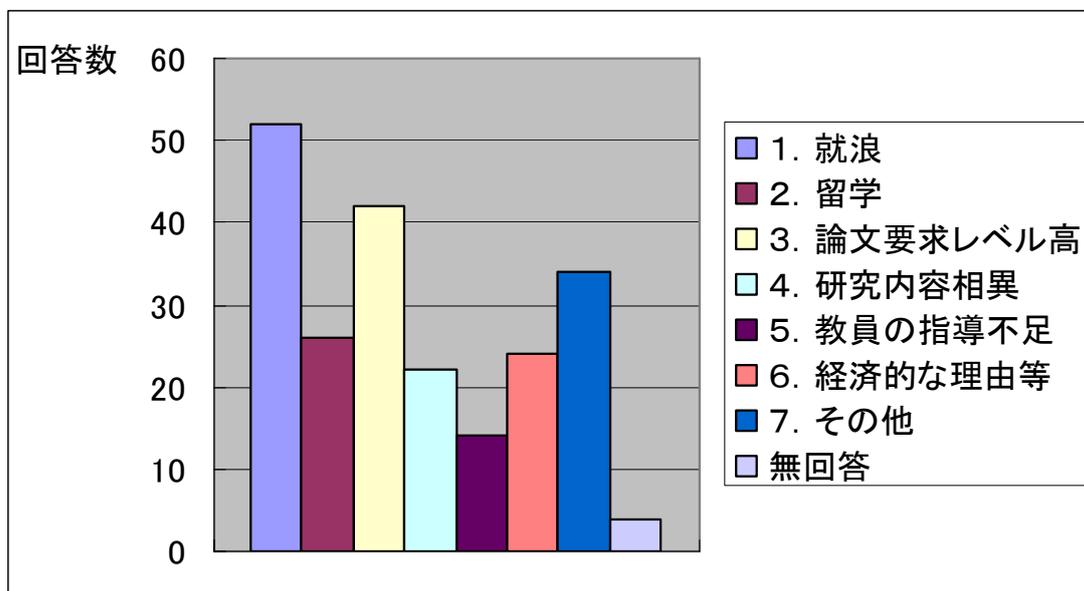
回収率 . . . 51.4%

**【1】「留年者が約3割に達すること、博士課程の修了者がほとんどいない」理由は
何だと思えますか（複数回答可）。**

1. 就職準備のためわざと留年(就浪)
2. 海外へ留学していたため
3. 修士論文や博士論文に要求レベルが高すぎる
4. 研究内容が意図していたものと違ってため
5. 指導教員による論文指導がなかった(すくなかった)ため
6. 経済的な理由、家庭の事情など学問とは直接関係のない理由のため
7. その他

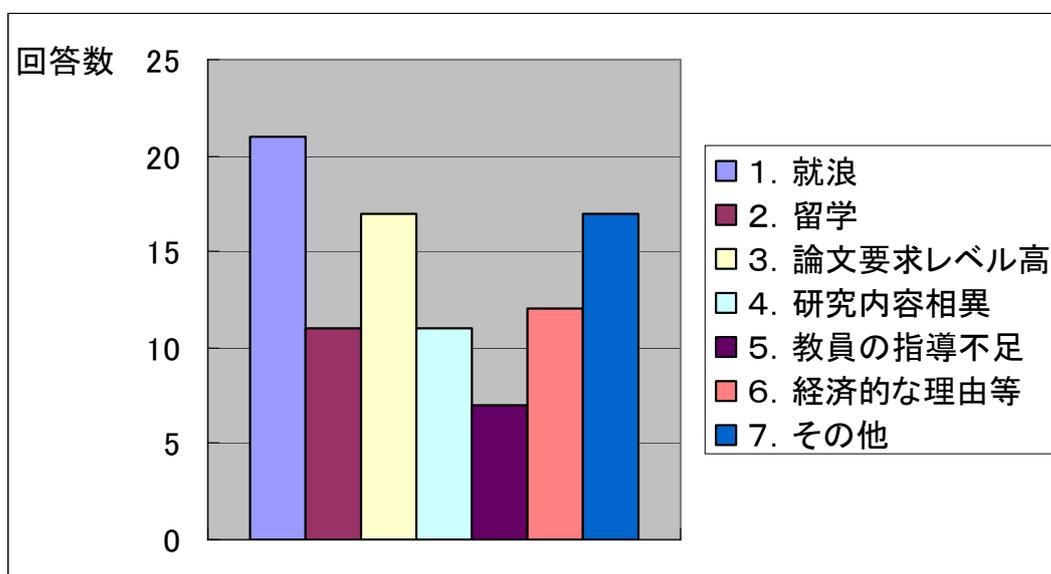
院生全体【1】「留年者が約3割に達すること、博士課程の修了者がほとんどいない」理由

	1. 就浪	2. 留学	3. 論文要求 レベル高	4. 研究内容 相異	5. 教員の指導 不足	6. 経済的な 理由等	7. その他	無回答
回答数	52	26	42	22	14	24	34	4
回答率	47%	24%	38%	20%	13%	22%	31%	4%



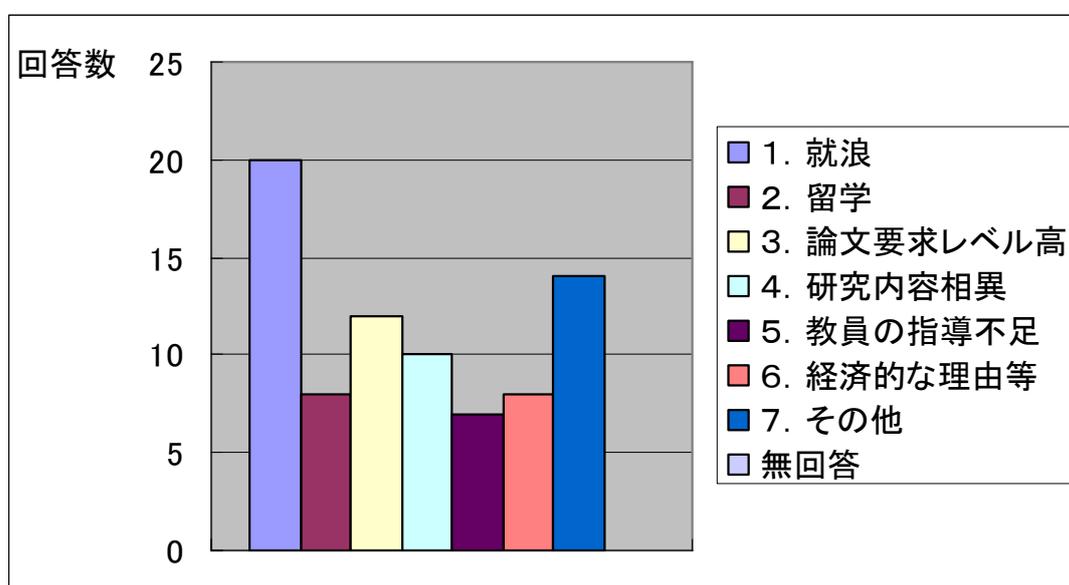
修士課程【1】「留年者が約3割に達すること、博士課程の修了者がほとんどいない」理由

	1. 就浪	2. 留学	3. 論文要求 レベル高	4. 研究内容 相異	5. 教員の指導 不足	6. 経済的な 理由等	7. その他	無回答
回答数	21	11	17	11	7	12	17	2
回答率	43%	22%	35%	22%	14%	24%	35%	4%



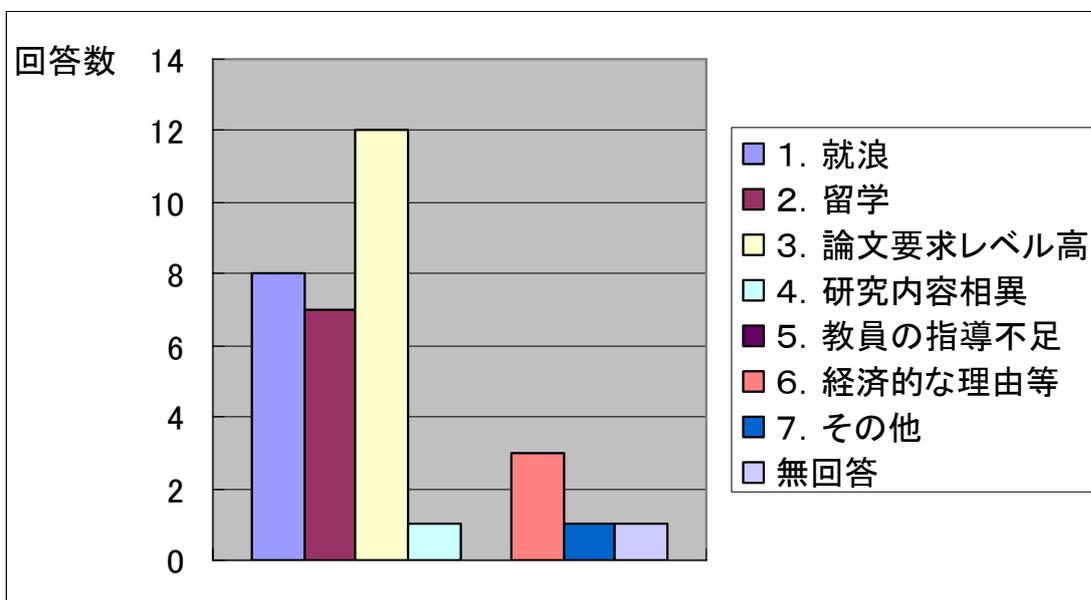
博士後期課程【1】「留年者が約3割に達すること、博士課程の修了者がほとんどいない」理由

	1. 就浪	2. 留学	3. 論文要求 レベル高	4. 研究内容 相異	5. 教員の指導 不足	6. 経済的な 理由等	7. その他	無回答
回答数	20	8	12	10	7	8	14	0
回答率	48%	19%	29%	24%	17%	19%	33%	0%



専修コース【1】「留年者が約3割に達すること、博士課程の修了者がほとんどいない」理由

	1. 就浪	2. 留学	3. 論文要求 レベル高	4. 研究内容 相異	5. 教員の指導 不足	6. 経済的な 理由等	7. その他	無回答
回答数	8	7	12	1	0	3	1	1
回答率	62%	54%	92%	8%	0%	23%	8%	8%

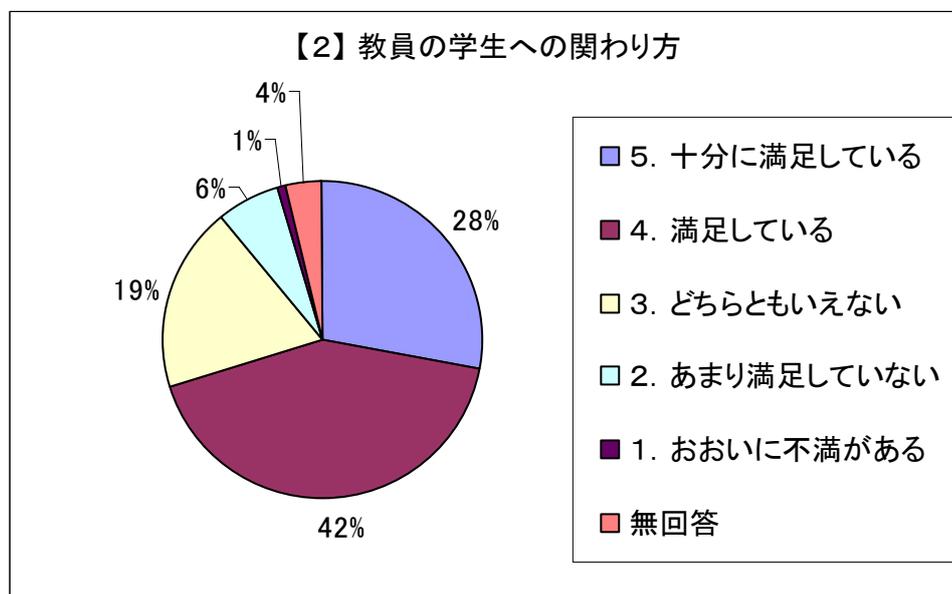


【2】京都大学では「自学自習」がうたわれていますが、教員の院生への関わり方（研究指導など）について。

- 十分満足している
 満足している
 どちらともいえない
 あまり満足していない
 おおいに不満がある

院生全体【2】 教員の院生への関わり方

	5. 十分に満足している	4. 満足している	3. どちらともいえない	2. あまり満足していない	1. おおいに不満がある	無回答
回答数	31	46	21	7	1	4
構成比	28%	42%	19%	6%	1%	4%

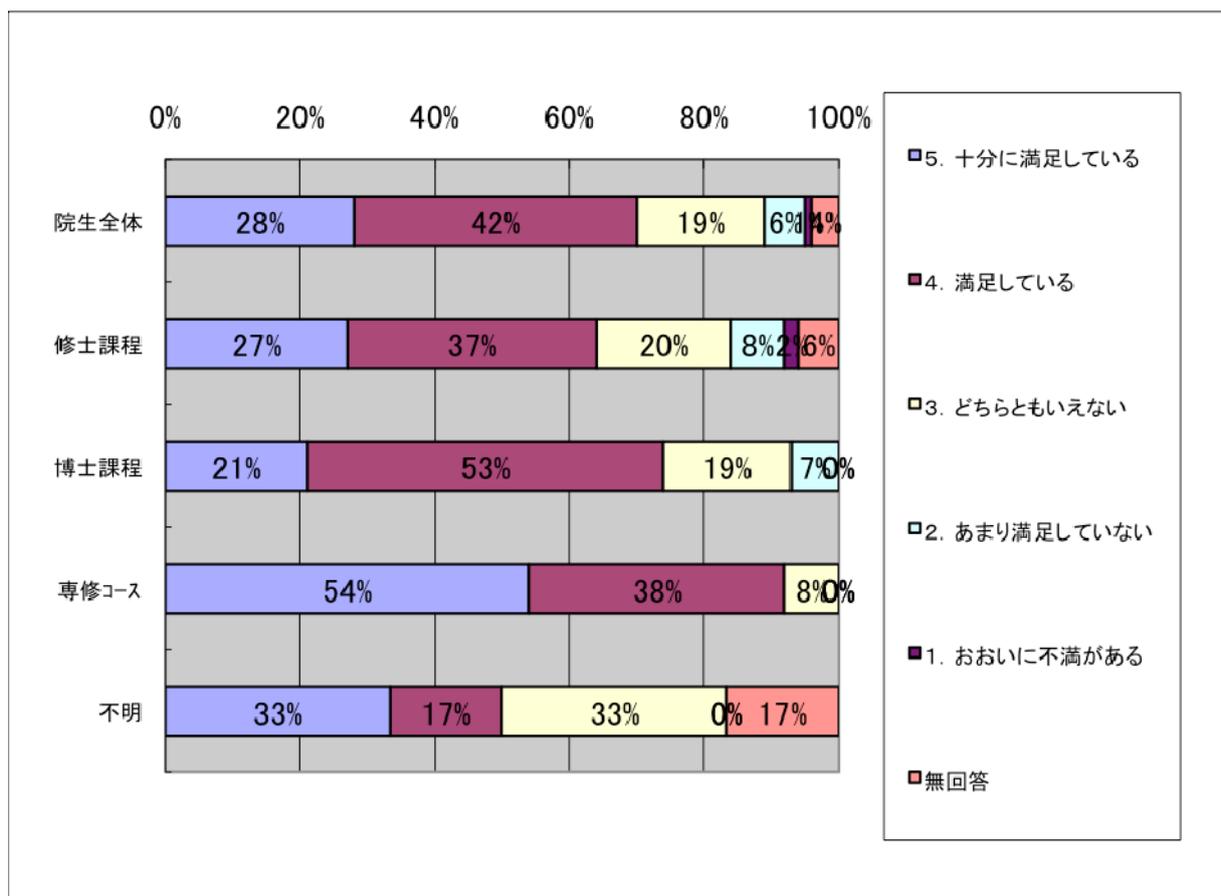


【2】 教員の院生への関わり方(回答数)

	5 ・十分に満足している	4 ・満足している	3 ・どちらともいえない	2 ・あまり満足していない	1 ・おおいに不満がある	無回答
院生全体	31	46	21	7	1	4
修士課程	13	18	10	4	1	3
博士課程	9	22	8	3	0	0
専修コース	7	5	1	0	0	0
不明	2	1	2	0	0	1

【2】 教員の院生への関わり方(構成比)

	5 ・十分に満足している	4 ・満足している	3 ・どちらともいえない	2 ・あまり満足していない	1 ・おおいに不満がある	無回答
院生全体	28%	42%	19%	6%	1%	4%
修士課程	27%	37%	20%	8%	2%	6%
博士課程	21%	53%	19%	7%	0%	0%
専修コース	54%	38%	8%	0%	0%	0%
不明	33%	17%	33%	0%	0%	17%



【3】【2】で満足していないと答えた方、どのように改善されれば良いとお考えですか？

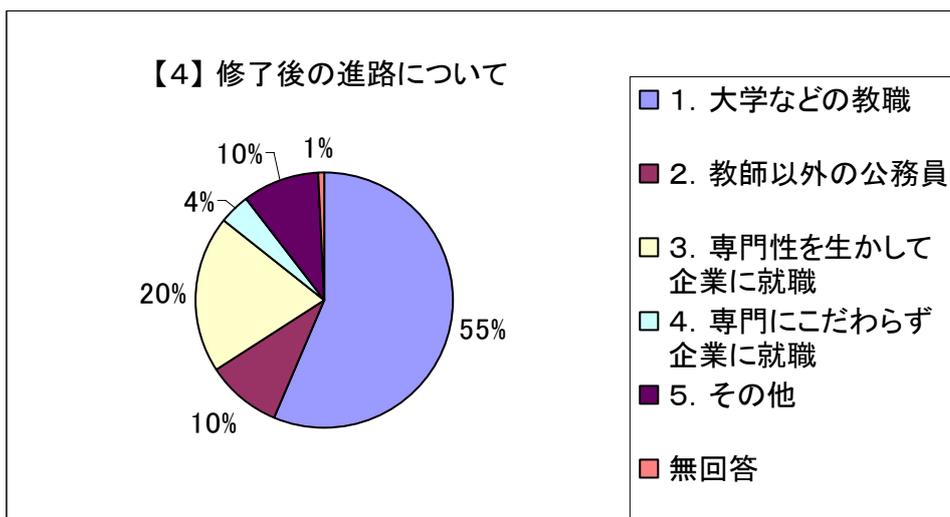
公開に際して省略しました。

● **【4】 修了後の進路についてお答えください。**

1. 大学など教職に就きたい
2. 教師以外の公務員及び公的機関に就職したい
3. 専門性を生かして企業・団体に就職したい
4. 専門にこだわらず企業・団体に就職したい
5. その他

【4】 修了後の進路希望

	1. 大学などの教職	2. 教師以外の公務員	3. 専門性を生かして企業に就職	4. 専門にこだわらず企業に就職	5. その他	無回答
回答数	71	12	25	5	12	1
構成比	55%	10%	20%	4%	10%	1%

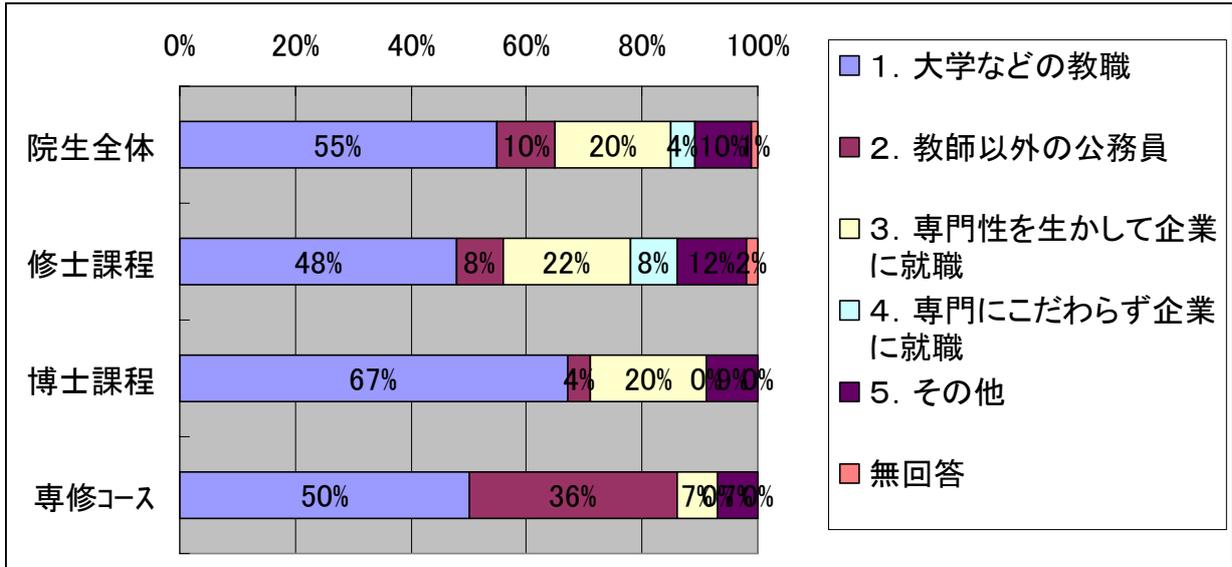


【4】 修了後の進路希望（回答数）

	1. 大学などの教職	2. 教師以外の公務員	3. 専門性を生かして企業に就職	4. 専門にこだわらず企業に就職	5. その他	無回答
院生全体	71	12	25	5	12	1
修士課程	29	5	13	5	7	1
博士課程	31	2	9	0	4	0
専修コース	7	5	1	0	1	0

【4】 修了後の進路希望（構成比）

	1. 大学などの教職	2. 教師以外の公務員	3. 専門性を生かして企業に就職	4. 専門にこだわらず企業に就職	5. その他	無回答
院生全体	55%	10%	20%	4%	10%	1%
修士課程	48%	8%	22%	8%	12%	2%
博士課程	67%	4%	20%	0%	9%	0%
専修コース	50%	36%	7%	0%	7%	0%



【5】教育学研究科の教育についてお尋ねします。

1. カリキュラム、内容など全般について
 十分満足している 満足している どちらともいえない あまり満足していない おおいに不満がある
2. 教員の研究指導・熱心さ・アドバイスの的確さ等について全般的に
 十分満足している 満足している どちらともいえない あまり満足していない おおいに不満がある
3. 博士・修士論文の指導について
 十分満足している 満足している どちらともいえない あまり満足していない おおいに不満がある
4. 進路指導など教員による助言・サポートについて
 十分満足している 満足している どちらともいえない あまり満足していない おおいに不満がある
5. 教務等の事務的なサポート体制について
 十分満足している 満足している どちらともいえない あまり満足していない おおいに不満がある
6. 教育・研究 施設・設備について
 十分満足している 満足している どちらともいえない あまり満足していない おおいに不満がある

【5】 教育学研究科の教育について(回答数)

	5. 十分に満足している	4. 満足している	3. どちらともいえない	2. あまり満足していない	1. おおいに不満がある	無回答
1. 専門科目カリキュラム、内容など全般	19	61	22	6	1	1
2. 教員の研究指導・熱心さ・アドバイスの的確さ等	41	39	16	12	0	2
3. 博士・修士論文の指導について	33	41	27	8	0	1
4. 進路指導などの教員による助言・サポート	27	34	31	15	3	0
5. 教務等の事務的なサポート体制	15	47	26	16	5	1
6. 教育施設・設備について	14	39	19	32	6	0

【5】 教育学研究科の教育について(構成比)

	5. 十分に満足している	4. 満足している	3. どちらともいえない	2. あまり満足していない	1. おおいに不満がある	無回答
1. 専門科目カリキュラム、内容など全般	17%	56%	20%	5%	1%	1%
2. 教員の研究指導・熱心さ・アドバイスの的確さ等	37%	35%	15%	11%	0%	2%
3. 博士・修士論文の指導について	30%	37%	25%	7%	0%	1%
4. 進路指導などの教員による助言・サポート	25%	30%	28%	14%	3%	0%
5. 教務等の事務的なサポート体制	14%	42%	23%	15%	5%	1%
6. 教育施設・設備について	13%	36%	17%	29%	5%	0%

【5】教育学研究科の教育について

